



下宿屋の  
文学青年



川崎ゆきお

知人訪問好きマニアの木下は、文学青年の青木を訪ねた。文学青年も死語だが、それにふさわしく下宿屋という死語の世界に住んでいた。

「わざわざ探さないと、こんな下宿屋はもうないねえ」

「この物件は載っていなかったんだ。口コミだよ」

下宿屋なので朝夕が付く。さすがに昼はない。学生や勤め人なら外に出ているためだ。

青木も昼間はバイトに出ている。

「笑い事にしないでくれよ」

木下はその部屋を訪ねたのは初めてで、青木も公開するのは初めてだ。何事も始めては初々しく見える。初めづくしだ。

江戸職人が作ったというブランド物の文机がある。これを窓際に置いている。二階から外が見える。それを見ながら執筆する感じだ。

「低いねえこの窓」

「ああ、丁度机の高さだ。ベタ座りや寝転んでいるときはこの低い窓がいいんだ」

窓の右側の壁に半月の小さな窓もある。

「ここって、女郎屋さんだったんじゃない」

「らしいけど」

「出ない」

「お女郎幽霊かい」

「そう」

「それはない」

「そう」

「それより、消えた」

「え、何が」

「データが」

文机の上に七インチの小さなノートパソコンが置かれている。だから、窓明かりなど必要ではないのだ。

「パソコンに入れていたデータかい」

「いや、タイプしているとき、消えた」

「ああ、よくあることだよ」

「それが気になってねえ」

「どんな風に消えたの」

「日本語をタイプしていて、変換前の文字なんだけど、それが消えた」

「よくあることだよ。打ち直せばいいんだ」

「未変換状態で、まだ確定していない状態で、ネットから何か自動送信されたらしくてね、その小窓が少し開いた。その窓にはシステムにアクセスしてもよろしいですかと出ている。OKを押したら、消えた。その窓がね。同時に変換前の文字も消えた」

「ああ、それもよくあることだよ」

「しかし、あの文章が思い出せないんだ。勢いで書いていたときでね、もの凄く良い言葉の群れを掴んだのだ。これは何処から来たのか分からない。流れだろう ねえ。その前の文脈から連想された言葉や語呂が生成されるんだ。この流れでしか出てこない文章なんだなあ。一行にもならない短い文なんだが、打ち直そうと 思っても出てこない。確定された文字列なら、消しても出て来るよね。それじゃない。宙に浮いたような処理中の文字列なんだ」

「メインメモリ内の一時記憶の中に入っているやつだろ」

「そうなの」

「ああ、だから、青木君のような文学者は自動変換じゃなく、ひと言ひと言変換し、確定させながら書いていく方がいいよ」

「それでは流れが消える」

「そうなん」

「しかし、あのフレーズ、ついに思い出せないじまいでね。それが残念でならない」

「別の言い回しをすればいいじゃないか」

「近いのは出るけど、やはりあれじゃない。あの文章にはならない。違う言葉じゃ駄目なんだ。同じ言葉でも前後が違くと駄目なんだ。あの妙な韻を踏んだような、あの文章でないよね。部品は限られているんだけど、どうしても思い出せない。その前の文章を受けての言い回しなんだなあ」

「まあ、よくあることだよ」

「そうなんだけど、その短編小説。もう続きを書く気がなくなった」

「さすが文学青年だね」

「笑いものにしないでね。冗談は控え目にね」

「はいはい」

「僕だって死後の世界なことは分かっているから」

「変なギャグは言わないようにするよ」

「頼むよ。僕も笑ってしまいそうになるから」

「自覚があるんだ」

「大自覚だよ」

「さすが文学者」

「だから、そういう揶揄は辞めてくれ」

「いや、野次だよ」

「まあ、こんな下宿屋をわざわざ探して住んでいるんだから、それだけでも確信犯だからね」

「雰囲気は大事だから」

「ありがとう」

「しかし、このセインチノートって、珍しいねえ」

「ああ、これは中古で見付けてきたんだ。まだ動くし、ネットも繋がるんだ」

青木は机からそのノートを持ち上げ、木下に渡す。

「小さいわりには重いねえ。それに特大のサンドイッチのように分厚い」

そのときコードが外れた。

「あ」

「何か外れたけど、何本か」

「ああ」

「一つはマウスでしょ、一つはランケーブルか、も一つ何かなあ。まさか電源……」

「あとで、繋ぐからいい」

青木は机にノートパソコンを戻した。

そしてコード類を繋ぎ直し、電源を入れるが、不正終了したためか、真っ暗の画面に英語が出た。

「ああ、またやってしまった」

「書きかけていたのがあったの？」

「ああ、保存していなかった」

「それはいけないなあ」

「いや、いいんだ。この儚さが」

「ほう」

「この儚さは文学と通じるんだ」

「笑いものにしないから、安心してよ」

「そう願うよ」

了